



勇者様にいきなり  
求婚されたのですが 4

富樫聖夜  
Seiya Fuyashiki

RB

レジーナ文庫

ルファーガ:  
エルフ

リュファス:  
魔法使い

ファラ:  
女戦士

レナス: 神官

ミリー: 女盗賊

ルイーゼ:  
シュワルゼ国  
第二王女

リュディヴィーナ

ノール  
魔族の幹部。「黒」の異名  
を持つ。セクシーな美女  
だが、残忍な性格。

ジラルディエール

アズール  
魔族の幹部。「青」の  
異名を持つ。冷静沈  
着な策略家タイプ。

フォルトゥナート

ヴェルデ  
魔族の幹部。「翠」の異名を  
持つ。気まぐれで、何を考  
えているのかわかりにくい。

登場人物  
紹介



アーリア

レベル : 1  
保有スキル: 「ツッコミEX」。  
(隠しスキル)

ルイーゼ姫の侍女。グリードに  
求婚され、モブキャラから「勇  
者の婚約者」に。そのおかげで、  
魔族に攫われてしまう。

グリード

レベル : 測定不能  
保有スキル: 「精霊の加護」、  
「薙ぎ術」その他  
いっぱい。

魔王を倒した「最強」かつ「最凶」  
の勇者。愛するアーリアを救出  
すべく、「魔王城」へ向かおうと  
するが……!?



目次

勇者様にいきなり求婚されたのですが	7
もう一つのヒログ	311
書き下ろし番外編 女戦士と幼馴染 <small>おとこななま</small>	333

勇者様にいきなり求婚されたのですが 4

## 1 魔王城の侍女

コンロ型の魔具に載せた鉄瓶からシユンシユンとお湯が沸く小気味よい音が聞こえます。私は火傷しないよう、取っ手にタオルをかぶせてその鉄瓶を持ち上げました。

鉄瓶の横には、茶葉の入ったポットがあります。すでにお湯で温め済みですよ。

さて、ここから勝負です。空気を含ませるように、一気にお湯を注がねばならないのですから。集中力が試されます！

……なのに。

「ねえ、アーリアまだあ？ 待ちくたびれたよ、僕」

その声のせいで、作業を中断させられました。

ソファに寝転がったまま声をかけてきた相手に、私はびしやりと言います。

「もうちょっとお待ちくださいってば！」

そうして、集中してポットの中にお湯を入れました。

うん、茶葉がよい感じにジャンピングしております。ポットから、さっそく甘い香りが漂ってきました。

さすが最高級茶葉。香りからして違います！

まさか、こんなところでミンドルク産の最高級茶葉にお目にかかるとは思ってもみませんでしたよ。たまには拉致されてみるものですね……って、これは冗談ですけどね。

さて、茶葉はあと二分ほど蒸らさねばなりませんので、恒例のアレから始めたいと思います。

——私の名前はアーリア・ミルフォード。シユワルゼ国第二王女、ルイーゼ様の第一侍女です。

他称「勇者の婚約者」にして、自称「勇者の教育係」。陰ではなぜか「勇者の調教師」などとも呼ばれております。

さらに最近は、「ティアナ姫の恋敵」なんて称号までいただき……って、長いのでそろそろ端折っていいですかね？

とにかくやたらたくさんさんの称号がある私ですが、その実体はただの侍女A、つまりモブキャラです。……いえ、モブキャラでした。

魔王に攫さらわれたルイーゼ様を救出してくださった勇者グリード様に、求婚されたあの時まで！

あれ以来、ただの侍女Aに過ぎなかった私の称号が、どんどん増えていったのです。そしてこのたび、新たな称号が追加されました。

それは――

「アーリア、まだあ？」

ああ、もう！　なんでこの人は、たった三分が待てないのでしょいかね！

「はいはい、たがいまお待ちしますから！」

私は内心舌打ちしつつ、ソファに寝そべりながら催促さそくしてくる魔族の幹部――翠ヴェルデことフォルトウナートに言いました。

……そうなんです。私は今、「魔王城の侍女」をやったりします。

正確には、「ヴェルデの侍女」でしょうか？

ただの侍女Aだったのが、とんだ遠くへ来たものです。人間のお城で働いていた日々が、懐なつかかしゅうございます。

……って、まだそんなに経ってないですけどね！



さて、魔族に人質として拉致された私が、なぜこうしてヴェルデに仕えているのか。皆様はとも不思議に思っておられることでしょう。

それには、海より深い深い事情があるのです。

グリード様の目の前でヴェルデに捕まり、空間をナイフで切り裂いたような切れ目に無理やり引きずり込まれた私は、すぐに気を失ってしまいました。

目を覚ました時、私はどこかの居間らしき部屋の床に寝かされて……いえ、転がされている状態でした。

ハツとして身を起こした私の目に飛び込んできたのは、三人の魔族——それも普通の魔族ではなく、強大な力と美しい容貌を持つ魔王直属の部下です。

「幹部」と呼ばれる彼ら。そのうちの二人とは、すでに面識がありました。

一人は群青色の髪と赤い瞳を持つ、青ことジラルディエール。彼は私にこう言いました。

「ようこそ、魔王城へ。勇者の婚約者——と。

もう一人は、私を拉致してきたヴェルデ。

緑色の髪と赤い瞳を持つ彼はソファに座っていて、首の後ろで指を組み、私を興味深

げに眺めておりました。

そしてアズールの隣に立ち、私を見下ろしている女性——それは初めて見る魔族でした。

確か新聞によれば、グリード様に倒されず生き残っている幹部は翠・青・黒の三人。つまり彼女は、黒と呼ばれる幹部に違いありません。

艶やかに波打つ、長い漆黒の髪。肩と二の腕、胸の谷間を大胆に出すデザインドレスもまた漆黒で、白い肌にぴったりと張りつき、魅惑的なボディラインを浮き彫りにしています。

美しいのは身体だけではありません。細く高い鼻梁にアーモンド型の目、その目を縁取る長い睫毛までもが、まるで第一級の芸術家を作ったかのように完璧な造形をしていました。

完成度としては、ルイーゼ様や第一王女のマリアージュ様より上かもしれませぬ。

けれどその美しさは「女神のようだ」と称されるお二人の可憐で楚楚とした美しさとは、まったく異なるものでした。

肌と髪とドレスが織り成すモノトーンの色彩の中で、血のように赤い目と唇だけが際立って鮮やかに見えました。見る者を魅了し、一度捕まったら逃れられないような毒々

しさです。

思わずじっと見ていたら、私を好意の欠片かけらもない目で見ていたノワールの赤い唇が、弧を描きました。

「そういうえば、私だけ初めて会うのよね。私は魔王グライデオスが三の配下、リュデアイヴィーヌ。黒と呼ばれているわ」

ノワールは私にそう名乗ってから、隣に立つアズールに尋ねました。

「ねえ、この子が本当にあの勇者の婚約者なの？ こんな魔力もない貧相な子が？」

「ああ。間違いない」

「あの勇者が選ぶくらいだから、よほど高い魔力か、あるいは何か特殊な力の持ち主かと思つたら……。勇者は頭の中身だけじゃなくて、女の趣味も変わつてるようね」

貧相で悪うございましたね。けつ。

私は心の中で悪態をつきました。だけどこれまで散々言われてきたことですので、いちいち傷ついたりはしません。

ついこの間も、隣国アルバトロの王女ティアナ様とその侍女たちに言われましたしね。コンチクショー。

ちなみに貧相というのは胸のことじゃなくて、私の容姿全体のことを言われたのだと

解釈しております。

「あら？ あなた……」

私を見下ろしていたノワールは、何かに気づいたように目を細めてから、ソファに座つたままのヴェルデに言いました。

「フォル、あなたこの子に術をかけたわね？ この子から、あなたの魔力を感じるわよ」

「……術？」

魔法をかけられているという自覚などなかったのですが、私は思わず呟つぶやきました。い、一体何の術を、いつの間にかけられてたんでしょうか？

「ああ、かけたよ？」

ヴェルデは「それが何さ？」とでも言いたげな口調で答えます。

「だって、その子魔力を持ってないだろ？ その上耐性たいせいも低いようだから、保護しとかないと。この城についたとたんに死なれちゃっても困るじゃない？」

な、なんですと!? 私ってば、魔力がない上に耐性もないんですか？

こんなところで自分の更なる残念仕様を知らされるとは、思いもありませんでした。魔力の耐性というのは、魔力に対する抵抗力のようなものです。これはシユワルゼ国

の王家専属魔法使いであるファミール様の受け売りですけどね。

耐性の高い人間なら大したダメージを受けない攻撃魔法でも、耐性が低い人間は瀕死のダメージを受けてしまうこともあるとか。

あと、これはあまり知られていない話ですが、耐性の低い者は、強い魔力を持つ者に近づいただけで影響を受けるらしいのです。

魔力に対して過敏すぎるがゆえに、他者の強い魔力に触れただけで、魔法酔いの状態になってしまう……たとえるなら、お酒が飲めない人が、お酒の香りだけで酔うようなものだそうです。酷い時は、卒倒することもあったと聞きました。

グリード様のパーティには強い魔力を持つ方が何人もいるので、耐性の低い人間に影響を与えてしまわないよう、普段は魔力をセーブしているそうですよ。

……そして今、私の目の前にいるのは魔族。それも、とりわけ強い魔力を持つ幹部たちです。

もしヴェルデが保護の術とやらをかけてくれていなかったら、とつくに気絶してそのまま天に召されていたかもしれません。怖っ！

「あの勇者の近くにいるのなら、少しは耐性がついているんじゃないの？」

そのノワールの言葉を小バカにしたように、ヴェルデはふっと笑います。

「人間の魔力に対する耐性がついても、人間と魔族の魔力は違うから意味ないよ」

まるで「そんなことも分からないのか？」とでも言いたげな口調でした。ノワールがムツとして、ヴェルデを睨みつけます。

どうもこの二人は、あまり仲が良くないような……

「まあ、いいじゃないかリュディ。勇者をおびき寄せるための人質なのだから、とりあえず保護しておくべきだろう」

アズールがそう言うのと、ノワールが私に視線を戻してにやりと笑います。

「分かったわ。とりあえずは、ね」

その言葉と笑みに、私はぞっとしました。

とりあえず……ってことは、いずれは殺されてしまうのでしょうか？

今度はアズールが、私を見下ろしながら笑みを浮かべました。

「言っておくけど、ここはあの勇者だつて簡単には来られない場所だ。強力な結界の中だからね。勇者の手先となる精霊も入ってこられない。前回、魔王城に張られた結界を破壊した時は精霊の力を使ったようだが、今回はそれもできないということだ」

結界の破壊云々はよく分かりませんが、精霊が入ってこられないということは、いつも私を守ってくれている精霊さんたちも、今は傍にいないということ……

そう思ったとたん、急に心細くなってしまいました。

いえ、精霊の守りなんてないのが普通なんですけど、何かと頼りにしていたものですから。ティアナ様やその侍女たちから守ってくれたのも、精霊さんたちですし。

今、私は敵地で完全なる一人ぼっち……

それに、精霊さんたちがいなければ、グリード様は私の現在地を把握できないんじゃないや……

い、今頃グリード様の感情が昂って、世界滅亡フラグが立ってないといんですが！何せグリード様ときたら、私のことになるかと我を忘れて、その強大な力を暴走させてしまいかねない人ですからね！

……というか私自身、自分がいるこの場所がどこだか把握してないわけですが。

「ここ、どこですか？」

私は部屋の中をきよろきよろと見回しながら尋ねました。

贅沢な調度品が置かれていて、どこかのお城かお屋敷のように見受けられます。けれど私が勤めているシュワルゼの城が外も中も白を基調とした明るい雰囲気なのに対して、ここは壁が濃い灰色であるせいも、全体的に陰気な感じですよ。

「だから、魔王城よ」

私の問いに答えたのは、ノワールでした。

「魔王城……」

って、魔王の城ですよ？ 魔王って魔族の王ですよ？

私がそんなバカな疑問を抱いてしまったのには、わけがあります。

だって魔王は、グリード様に倒されたはずなのですから。その時に魔王城も、崩壊して跡形もなくなつたと聞いています。

……もしかしてアレですか？ 勇者物語の二次創作でよくある設定のように、実は勇者が倒したのは偽物で、本物の魔王は生きていたの……？

ちなみに二次創作では、そこから魔王と勇者のラブストーリーに突入するものがあるそうです。私は読んだことがありませんが、そういうお話にキャッキヤする娘さんたちがいるとか。

……まあ、それは置いといて。

とにかく魔王城と言うからには、ここに魔王がいると解釈していいのでしょうか？

私はそう尋ねようと口を開きかけましたが、ふと嫌な予感を覚えて口を閉じました。だって考えてみてください。グリード様が倒したのが偽の魔王だったなら、

「魔王は倒されたのでは？」

「実は生きているんだ、ザマリロ」という感じで済むかもしません。

でも幹部たちがこの城を「魔王城」と呼ぶのが、死んだ魔王を惚しのんでのことだったとしたら、

「魔王は倒されたのでは？」

「お前の婚約者にな、コノヤロ」となるのではないでしょうか？

それは非常に危険な流れです。下手なことを言つて魔族たちを怒らせないよう、黙つているのが賢明でしょう。

……だって、私はグリード様と約束したのですから。

グリード様が助けに来てくれるまで、絶対に無事でいると。

私は口を噤つぶんだまま、魔族たちの言葉待ちます。

「さて、君をここに連れてきたのは先ほども言ったように、勇者をおびき寄せするための人質としてだ」

アズールが愉悦うれの笑みを浮かべながら言いました。

「あの勇者とまともにやり合おうとすれば、こちらの分ぶが悪いからね。けれど、君が

我々の手の内にあれば、彼はどうすることもできないだろう？」

私はぞつとして、身を震わせました。

幹部たちは、グリード様に何をしようとしているのでしょうか。……いいえ、彼らの目など決まっています。魔王を倒したグリード様に復讐ふしゅうすること——つまり殺すことです。

私は床に座つたまま、膝ひざに置いている両手でエプロンをギュッと握りしめました。

私を盾たてにされたら、グリード様は魔族たちに手が出せないはず。

グリード様は自分自身にも他人にも、ほとんど関心がありません。でも唯一ゆいいつの例外が私であつて、私のためなら自分の命なんてあつさり捨ててしまふでしょう。

——つて、そんなの嫌ですよ！

何とかしなければ……何ができるか分からないけど、とにかく私のせいでグリード様が命を落とすことだけは避けなければ！

焦つた私は、ノワールが次に口にした楽しい言葉ことばに仰天きやうてんしました。

「ねえ、この子、殺さなければいいんでしょう？ 腕うでの一本くらい、失つても死なないわよね。この子の腕を切り落として送つてやったら、あの勇者、どんな顔をするかしら？」  
な、何ですと!? グリード様の身を心配している場合じゃありませんでした！

「ああ、それはいいかもね。勇者に対する効果的な脅しになるだろう」  
アズールがクスツと笑いながら賛同します。

「……冗談キツイですよ」

私は顔を引きつらせました。

確かに、腕を一本なくしたくらいじゃ死なないかもしれませんが。

でも、だからってなくしたくはありません！ それに送られてきた私の腕を見てグリード様がどんな反応をするのか、想像しただけで恐ろしいです！

「大丈夫。魔法で止血してあげるし、何なら痛みもないようにしてあげよう」

アズールが笑みを浮かべたまま、私の方に一歩踏み出しました。

痛いのも血が出るのも嫌ですが、それ以前に腕を失くすのはゴメンです！

私は、お尻で後ずさりしながら叫びました。

「全然大丈夫じゃありません！」

その直後でした。のんびりとした声が、緊迫した空気を破ったのは。

「えー、それ困るよ」

声の主はヴェルデです。彼はソファから立ち上がると、私の方に向かって歩きつつ、場違いなほど明るい声で言いました。

「だって、その子には聞きたいことや話したいことが色々あるんだもん。腕を切り落としたりしたら、気兼ねなく会話できなくなるじゃないか。ダメダメ、腕を取るのナシ」

それを聞いて、アズールが顔を顰めます。

「フォル」

「そもそも僕が君たちの計画に協力したのは、この子と話をしたいからだって言ったじゃない。それなのに、勝手なことされちゃ困るなあ」

ヴェルデはそう言いながら私の横に来ると、腰に腕を回し、ひょいっという感じで持ち上げました。

「へ？」

気づいたら私の身体は宙に浮いておりました。

まるで犬猫みたいに、小脇に抱えられていたのです。……って私、人間なんですけど？

「この子は僕が預かるよ。シユワルゼの城で侍女やってたんなら、ちょうどいいや。僕の侍女をやってもらおうかな」

「は？」

いきなり何を言い出すのでしょうか、この人は。いやこの魔族は。こんな状況で、私を侍女にするなんて……

いえ、腕を一本なくすより遙かにマシですが……気のせいでしょうか、「僕の侍女をやつてもらおう」が、「僕のペットをやつてもらおう」に聞こえたのは。

「フォル、お前こそ勝手なことをするな」

アズールが硬く鋭い声で言いました。その横に立つノワールも、ヴェルデを睨みつけています。

けれどヴェルデはどこ吹く風で、私を抱えたまま可笑しそうに笑いました。

「勝手？ 面白いことを言うね、ディエール。最初に言っておいたはずだよ？ 僕は君たちがやろうとしていることに興味はないって。手を貸すのはこの子を攫うまでだったこともね。もはや僕の仕事は終わったんだから、後は好きにさせてもらおうよ。君たちも、勇者をおびき寄せるなり何なり好きにすればいい。ただし、この子は僕の侍女にする」「フォルトウナート！」

「なんだい、ジラルディエール。やるのかい？」

ヴェルデはクスツと笑うと、不意に雰囲気さがらりと変えました。

その表情も佇まいも、何ら変わっていません。けれど纏っている空気が、ナイフみた

いに鋭くなったのです。

アズールの顔がこわばりました。どことなく、怯んでいるようにさえ見えます。

「やるなら喜んで相手になるよ。だけどディエール、第二位の君が、第一位である僕に勝てると思う？ あまつさえ、勇者によって核の一つを失っている君が？」

その口調は自信に満ち溢れていて、ヴェルデが圧倒的に有利であることを言葉以上に物語っておりまし。

そういうえば、アズールは以前、グリード様に核のあった足を切断されています。核とは、魔族の本体とも言える魔力の塊のことです。

切られた足は元に戻っていますが、中の核は失われたままのはず。その分アズールの力は落ちているに違いありません。

そして、位。これは『勇者物語』に書かれていることですが、魔王直属の配下である幹部には、序列があるそうです。上の位を持つほど、魔力が強くて実力があるのだとか。つまり、一位であるというヴェルデは魔王に次ぐ実力者であり、二位のアズールは実力で彼に劣るはずなのです。

これは不戦勝ですかね。私がそう思った時、アズールの横にいたノワールが、ヴェルデを睨みつけながら一歩前に出ました。

「私がいることを忘れていないかしら？」

おおっと、ノワールが、アズールの味方として参戦するということでしょうか？

「おや、君もやるかい？ リュディ」

ヴェルデが楽しそうに応じました。

ど、どうなるのでしょうか。さすがの一位でも、二位と三位を同時に相手にするのは大変なんじゃ……

でも、これは私にとってはチャンスかもしれないかもしれません。もしかしたら、共倒れしてくれるかも……？

私がヴェルデに抱えられたままちよっぴり腹黒いことを考えていると、アズールがノワールとヴェルデの間に入って言いました。

「リュディ、今はやめておこう。勇者に王手をかけた今、我々が同志討ちして無駄に戦力を落とすことは避けたい」

「ちっ。……分かったわ、ディエール」

ノワールはそう言って、洪々引きます。

次にアズールは、ヴェルデに向かって言いました。

「勝手にしろ、フォル。ただし、その女をここから出すなよ」

それを聞いたとたん、ヴェルデは纏っていた殺気を綺麗に消して、にっこり笑います。  
「じゃ、決まりだね」

ヴェルデがそう言った直後、不意に私の視界が二重写しのようになって歪みました。

気づけば、私はヴェルデと共に別の部屋にいました。さっきの部屋より少し小さく、調度品の感じも違っています。

どうやらヴェルデが私を抱えたまま、転移の魔法を使ったみたいです。

ヴェルデは私を床に降ろすと、何も言わずに壁にかけられた大きな鏡に向かってすたすたと歩いていき、指先でチョンと触れました。

すると、それまで私とヴェルデを映していた鏡に、アズールたちの姿が映し出されたのです。しかも音声つきで。向こうはさっぱり気づいていない様子で、話を続けていました。

「相変わらず、何を考えているのか分からない奴だ」

アズールが顔を擧めて呟きました。

ため息が交じっているように聞こえたのは、気のせいじゃないと思います。

「ちっ。一位じゃなければ、とっくに抹殺してるのに」

ノワールは私たちがいた場所を睨みつけ、そう吐き捨てました。やっぱり彼女は、ヴェルデとは気が合わないみたいです。

「いちいち、そういきり立つものではないよ、リュディ。いい加減な奴だが、実力があることは間違いない。奴が魔力でこの城を維持しているからこそ、我々は結界の維持と勇者への復讐に力を注げるわけだし。それに、奴が気まぐれを起こすのはいつものことだろう」

ノワールの手を取りソファに導きながら、アズールは言いました。腹立たしげに腰を下ろしたノワールは、ぶつぶつと呟きます。

「まったく、解せないわ。なんで魔王様は、あんないい加減な男を重用されていたのかしら。一位のくせに、幹部をまとめる役割も、ディエールに押し付けて……！」

彼女の隣に腰を下ろしてから、アズールが言います。

「魔王様は、その気まぐれなところを面白がっておられたのさ。いかにも魔族的だとね」

「魔族的ですって？ ふんっ」

ノワールは鼻で笑いました。

「まあ、奴にはあの女のお守をさせておけばいい。我々の手間が省けるしな。それより、

シュワルゼの城の方はどうなっている？」

その言葉を聞いて、ノワールは気を取り直したらしく、真顔で答えます。

「斥候からの情報によると、もう全滅させられたらしいわ。さすがと言うべきか……予想より早いわね」

「ならば、こちらの予定も早めればいいだけだ」

アズールはそう言って、にやりと笑いました。

「バカだねえ。気まぐれだからじゃなくて、負の連鎖の外にいたからだよ。そんなことも分からないから、君たちはダメなのさ」

鏡に向かって、ヴェルデはやれやれといった様子で呟きました。

アズールとノワールは、今後の計画とやらについて話し合っているようでした。

私にも関係がありそうなので、聞き逃すまいと一歩踏み出したとたん、ヴェルデが私を振り返りました。すると、鏡の中の光景はふっと掻き消えてしまったのです。……ちえつ。

ヴェルデは私に向かって、のんびりした口調で言いました。

「というわけで、君は今から僕の侍女ね」

「は、はあ……」

他に何が言えたでしょう。けれどヴェルデはそれが気に入らなかつたようで、不満げに唇を尖らせました。

「何？ その気のない返事は。何ならディエールたちのところに戻るかい？ 僕は君の腕が一本なくなつても、別に構わないんだけど？」

ひいひい！

私は焦って叫びました。

「い、いえ、侍女がいいです！ 元々侍女ですから、侍女やります！ むしろ、やらせてくださいー！」

——そうして私は、「魔王城の侍女」になつたわけです。

なんで自分を攫つてきた相手に仕えなければならぬのか……と思いましたが、腕を切られるより遥かにマシです。

そんな私が最初に命じられた仕事が「お茶を淹れること」でした。

どこから持ってきたのか分かりませんが、この部屋にはお茶を淹れる道具が一式揃つておりました。シュワルゼの城で使われているのとよく似たコンロ型の魔具や鉄瓶、そしてもちろん茶葉もあります。

それらを棚から取り出した私は、シヨックを受けました。

なんと茶葉が、最高級と言われるミンダルク産のものだったのです！

魔族のくせに……！  
大切だからもう一度言います。魔族のくせに！

魔族は生きるのに食べ物や飲み物を必要としないので、それらを口にするのは完全に嗜好品としてだと聞いています。お茶は人間にとつても嗜好品なわけですが、何か納得いきません！

魔族が飲むお茶など、せいぜい二級茶葉で十分だと思つています。最高級品なんて、贅沢ですよ！

そんなことを考えながら支度をしているもので、手つきがいつい乱雑になつてしまつています。

そもそもこのミンダルク産の茶葉が全然出回らなくなつて更に価格が高騰してしまつたのは、魔族のせいなんですよ。

ミンダルクという国とレイクサリダという国の間にある山では、昔から良質の茶葉が採れていました。

でも魔王城がその山に建てられてからというもの、怖がつて山に立ち入る人が少なく

なり、茶葉が出回らなくなってしまったのです。

グリード様のおかげで魔王城がなくなった後も、気味悪がって山に入る人間が少ないため、未だに価格は高騰したまま。いつになったら、気軽に買えるような値段になるやら……

……などと思っていたら、いつの間にか目の前の鉄瓶てつびんから、シュンシュンというお湯の沸く音がしておりました。

私は茶葉の値段のことはひとまず置いておき、ポットにお湯を注ぐ作業に集中することになりました。せっかくの最高級茶葉です。無駄にはしませんよ。

コンロ型魔具の火を止めると、私は鉄瓶の取っ手に素早くタオルをかぶせて持ち上げ……

その時、ソファに寝転がったヴェルデから能天気な声で催促されたのでした。

「ねえ、アーリアまだあ？ 待ちくたびれたよ、僕」

——そして冒頭の場面に戻るのです。

「お待ちせしました」

ようやく淹いれ終えたお茶を、私はヴェルデのもとへ運びました。

手つきは多少乱雑であったものの、しかるべき手順を踏みましたので、美味おいしいお茶

になっているはずです。

「お、待っていました！」

ヴェルデは起き上がって、カップを持ち上げました。そして一口飲んで言います。

「うん、美味しい。以前宿屋で淹いれもらったものより何倍もいい」

おっと、褒ほめ言葉が出ました！ もっとも、高いお茶ですから美味しくって当然ですけれどね。

それよりも、何やら気になることを言っていたような……？

「宿屋？」

一瞬、魔族の宿屋かと思いましたが、そんなわけありませんよね！ 人間の宿屋に決まっています！

「なんで魔族なのに宿屋に？ というか、その赤い目は隠せないはずでは……」

高位の魔族は人間の姿をしていますから、人間の中に紛まぎれ込むこともできなくはないと思います。

でも多くの魔族がそれをしない理由が、魔族が人間を嫌っているということの他に、もう一つありました。

それは、魔族特有の赤い目。その特徴を、彼らはどうしても隠せないらしいのです。

なので宿屋なんかに行ったら、すぐに魔族だつてバレるはず。それなのに、お茶を淹れてもらっただなんて……宿屋の人を脅したのか、もしくは宿屋の人がとんでもなくツワモノだったのか……

「確かに、この目の色は変化させることも、隠すこともできないよ」

ヴェルデはティーカップを持っていない方の手で、自分の目を指さして言いました。

「でも、相手に術をかけることはできる。僕の目が赤く見えないよう、宿屋の人間に術をかけたのさ。彼らには、きつと黒い目に見えていたと思うよ。魔法使いや魔力に敏感な人間がない片田舎の町だったからこそできた、荒業だけだね」

「そんなことができるんですか……!」

自分の目の色が変わえられないのなら、相手の見え方を変えてしまおうという発想です。

「でも、そんな手間をかけてまで、なぜ宿屋に行く必要が……? いや、そもそも魔族が人間の宿屋に泊まるなんて、ものすごく変じゃないですか?」

つい、正直に言ってしまった。

けれどヴェルデは気を悪くした様子もなく、カラカラと笑って言います。

「そりゃあ、人間に興味があるからだよ。彼らのことを知りたいなら、身近で観察する

のが一番だろう? いやあ、人間のふりをしてあちこち放浪するの、楽しかったなあ」

「そ、そうですか……」

とづくに分かっていたことですが、ヴェルデってとても変わっています。少なくとも、私がイメージする魔族とはまったく違います。

アズールとノワールからは気まぐれで自分勝手だと思われるようですが、そんなところも含めて妙に人間的で……それに何より、一番違和感を覚えるのは。

——ヴェルデには、人間に対する敵意がないのです。

アズールやノワールからひしひしと感じられた人間への憎しみが、ヴェルデからはまったく感じられません。

「あの……人間が嫌いじゃないんですか?」

恐る恐る尋ねてみたら、あっさり答えが返ってきました。

「別に好きでも嫌いでもないよ? でも興味はあるし、人間のこともっと知りたいと思っている。色々なところを回って、面白い発見がいくつもあつたよ。そのうち飽きるかと思つたけど、なかなか興味が尽きないねえ」

そしてヴェルデは、何かを思い出したようにクスクス笑いだしました。

うーん、よく分かりません。魔族って、人間を憎んでいるものだとばかり思っていた

ので。それに好きでも嫌いでもないのに興味があるって、微妙に矛盾むじゆんしている気が……でも私を侍女にした理由が何となく分かりました。きっとそれも、「人間に興味があるから」でしょう。アズールたちに協力したのも、私と話が合ったからだって言うてましたし。

何やら私に聞きたいことがあるとか……でも私が知っていることって一体何でしょう？

全然思いつきませんが、その知りたいことを私から聞き出したら、ヴェルデは私に対する興味を失ってしまうかもしれません。そうなれば、こうして話すことなどできなくなるかも……

彼と会話ができる今のうちに、できる限り情報収集しておかないと！

「えっと……いくつか聞いてもいいですか？」

機嫌が良さそうにお茶を飲むヴェルデに向かって、私はそう切り出しました。

するとヴェルデは、とても軽い口調で「いいよ」と答えます。

……そんな気軽に言っちゃっていいのでしょうか？

「ただし三つまでね」

ですよね〜！

まあ、無制限にほいほい答えてくれるとは私も思っておりませんでしたよ。でも三つとなると、慎重に決めないといけません。

私は気を引き締めて、一番気になっていことから尋ねました。

「シユワルゼの城は……城のみんなはどうなったのですか？ 魔獣があちこちに出現したそうですが、あの後は……」

まずは自分の安全を最優先すべきだと思い、今まであまり考えないようにしていたのですが、あれからみんなはどうなったのでしょうか。

姫様は？ 他の王族の方々は？ 宰相様やファミール様は？

グリード様たちがいる以上、最悪の事態にはなっていないと思うのですが……うう、心配です。皆様の方は私を心配しているでしょうけど。

「ノワールが放った魔獣たちなら全滅したよ。勇者が一匹残らず消滅させたからね」

「ほ、本当ですか？」

「嘘を言っとうすんのさ。もちろん本当のことだよ」

ホッとした私ですが、続くヴェルデの言葉に仰天ぎょてんすることになります。

「しかしあの勇者、さすがというか、もはや化け物の域ぎょくじゃない？ たった一人で、しかもほぼ一瞬にして、全ての魔獣を消し去ったんだってよ。もう笑っちゃうよね〜。で

も力を放出しすぎて、今頃動けなくなってるんじゃないかな」

「は？ は？ どういうことですか？」

——そしてヴェルデから詳細を聞きだした私は、焦燥に駆られました。

なんでも私が攫われた直後、グリード様は城全体を攻撃範囲とする魔法を使ったのだそうです。それも人間には危害を加えず魔獣だけを殲滅する、複雑で強力な魔法を。

そのおかげで魔獣は消え去ったようですが、広大な範囲に対して一度に魔力を放出すると、かなり身体に負担がかかるので、さすがのグリード様も無事では済まないかもしれないと……

ちよ、ちよつとおおお！

「まあ、あの勇者、魔力も何もかも人外つばいから死にはしないと思うけどね」

確かに城のあちこちに出現した魔獣を一匹ずつ地道に倒していたら、いくらグリード様たちが頑張っても、必ずどこかしらで被害は出ていたでしょう。

だからグリード様は、一瞬で終わらせる方法を取った……それは理解できます。

け・れ・ど！

私はその場で地団駄を踏みたくなりました。

ちよつと目を離すと、すぐコレだ！ なんであの人は、自分の身体を大事にしてくれ

ないのでしょうか。自分自身に対して、あまりにも無頓着すぎるんですよ！

グリード様を心配する私や、お仲間の皆様の気持ちなんて、気にもしないのです。

あああもう、これは帰ったら、絶対に教育的指導ですよ！

ソファの脇に立ったままそんなことを考えている私に、ヴェルデがカップを差し出しながら言いました。

「何だか百面相しているところ悪いけどさ、アーリア。お代わりちようだい」

「あ、はい」

空になったカップを見て、私は我に返りました。侍女の習い性というやつでしょうか。

再びお茶を淹れてヴェルデのもとに戻った時には、だいぶ落ち着きを取り戻しておりました。

グリード様のことはかなり心配ですが、エルフのルフアーガ様や神官のレナス様といった治療術を使える方々が近くにいますから、きっと大丈夫でしょう。

とりあえず今は、自分にできることをしなければ。

私はお代わりのお茶をヴェルデに手渡してから、二つ目の質問をしました。

「さっきアズールとノワールが、ここは魔王城だと言っていました……ここには魔王がいるんですか？」

それを聞いて、ヴェルデは一瞬笑みを消しました。けれど、またすぐに笑みを浮かべ、目の前のテーブルにカップを置いて言います。「いや、ここに魔王と呼ばれる存在はいない。……魔王様は、君の勇者に倒されてしまったからね」

その言葉に、私はヒヤッとしました。

けれど、ヴェルデは特に気を悪くした様子もなく言葉が続けます。

「ここには我々三人しかいないよ。ここを魔王城と呼ぶことを決めたのはディエールたちさ。元の城と同じ場所、同じ外観にすると主張したのもね」

ということは、ここは元々魔王城が建っていた場所——つまりレイクサリダとミンダルクの国境の山の中なのでしょう。

彼らは主である魔王が亡くなったその場所に、魔王なき魔王城を建てたということになります。しかも同じ外観で。

……亡き魔王に対する忠誠心からなのか、魔王を偲んでのことなのか。いずれにしろ、執念みたいなものを感じます。

ヴェルデは思いつきり顔を擧げて言いました。

「陰気だし、未練たらしいよね！ バカじゃないかと思うよ。魔王様はもういない。こ

の世界のどこにも、魔力の欠片すら残っていない。それなのに城だけ復活させるなんて。あいつらはこの城を、魔王様の弔いの場にしたいんだってさ」

それからヴェルデは、眉を上げて皮肉っぽく笑いました。

「でもそれってさ、まるで人間のようにじゃないか。そう思わない？」

「そ、それは……」

親しい人を亡くしたら弔いたい。殺されたのなら敵を討ちたい。人間なら、誰しもそう思うことでしょう。気持ちには分かります。

けれど、魔族は元々個人主義で群れることが少なく、親子や兄弟の絆もほとんどないそうです。互いに仲間意識も薄く、魔王がいてようやくまとまる。そんな種族なのです。ですから当然、仲間の死を弔うという概念もありません。彼らの死は人間の死とは違い、単なる消失なのです。

それなのに、アズールたちは未だに亡き魔王に忠誠を誓ってその死を嘆き、グリード様に復讐しようとしている。そして魔王城を同じ場所に再建し、魔王の弔いの場にしようと考えている。

そんな感情を抱く彼らは、まるで人間のようなだ。ヴェルデはそう言いたいらしいです。「人間を憎んでいるくせに、人間と同じようなことをしている。死んだ仲間を弔う魔族

なんて、聞いたことがない。本当、バカだと思っよ」

ヴェルデはそう言うと、再びカップを持ち上げて笑いました。

「もつとも、今僕らが存在していること自体が前代未聞だけどね。魔王が消滅した後も生き残っている幹部など、僕らが初めてだよ」

「た、確かにそうですね」

過去の勇者は例外なく、全ての幹部を倒してから、ラスボスである魔王と戦っており。なぜなら普通は幹部を全員倒さないと魔王城への道が開かれませんが、むしろ幹部の方から勇者を魔王に近づけまいと戦いを挑んできたからでした。

けれど、今回初めてその常識が覆されたのです。グリード様は幹部を全員倒さず、いきなり魔王に挑んで倒してしまいました。

……だからこそ今、私がこんな状況に置かれているわけですけどね。

「せっかく生き残ったんだから、あとは好きに生きたいのに。あいつら、変に真面目でさあ。自由に生きて行こうとしてた僕まで巻き込まれちゃったよ」

やれやれとでも言いたげな口調でした。

私には、どっちかというところとアズールたちよりヴェルデの考えていることの方が、よく分からないんですけど……

ヴェルデに人間的だと揶揄されたアズールとノワールの言動は、まだ理解できません。

でもヴェルデの言動は、私の理解の範囲を超えています。

魔族なのに人間を憎んでいないどころか、主である魔王を倒したグリード様のことすら、どうでもよさそうですし……。一応アズールたちに力は貸したみたいですが、結局は好き勝手に行動していますし……

何を考えているのか、さっぱり分かりません。まあ、その気まぐれのおかげで、私は今のところ無事なわけですが。

カップに口をつけてお茶を啜ったヴェルデは、私を見て言います。

「それで、三つ目の質問は？」

私はハッと、しばし思索しました。

本当に聞きたいのは、この城から脱出する方法です。でもどう考えても、さすがにそれは教えてくれそうにありません。

他に知りたいことといえば、アズールたちは私をどうするつもりなのか、そしてグリード様に対して何を仕掛けようとしているのかということですが……

それは、私の精神状態のためにも聞かない方がいいような気がします。絶対に、ろくなことじゃないに決まっていますから！

あとは……そう、これがありましたっけ。

「あの、私に術をかけたと言っていましたよね。それって、どういう術ですか？」

実はちよつと気になっていたのですよね。ヴェルデは魔力への耐性がない私を保護しているとか言っていましたけど、本当にそれだけなのかって。知らず知らずのうちに精神を操作されていたりしたら、怖いですから……

私の質問を聞いたヴェルデは、きよんとしました。

「だから、君を魔力から保護しているだけだけ？ 何か調子でも悪いの？ まあ耐性がなさすぎて、その保護の術にすら反応して具合が悪くなる可能性はあるけど……」

「あ、いえ、保護してもらってるだけならいいんです。ただ……こんな状況なのに、自分がやけに落ち着いているので、そのような術でもかけられているのかと……」

そうなんですよ。魔族の幹部に攫われて、たった一人でこんなところにいるんです。普通ならパニックになったり、恐慌状態になったりしそうなのに、妙に落ち着いてるんですよ。

いや、怖いことは怖いんですが、それほどでもないというか……

だからヴェルデがかけた術のせいかなと思っただけですが、ヴェルデに顔を顰められてしまいました。

「僕の術のせいじゃないよ、それ。だいたい、なんで僕が君の精神状態まで慮る必要があるわけ？」

ですよね！ 言われてみれば、変わり者とはいえ魔族であるヴェルデが、私にそんな気遣いするはずがなかったですよ。

「単に、肝が据わってるだけじゃないの？」

「肝が据わってる……ですか？」

どこかで聞いたフレーズです。

——はっ。もしや……あまり考えたくないですが、いわゆる「ミルフォード気質」ってやつでしょうか。

父を筆頭として、我がミルフォード家が持つ特有の気質。面倒くさがりだったり趣味に異常に没頭したりする反面、逆境に強く、危機に瀕しても妙に肝が据わっているという……

……いえ、肝が据わっていること自体は良いのですが、やっぱり自分もあの父の子であつたかと思うと、複雑な気持ちです。くう。

「そういうえば、その術の話が出たからついでに言うけど……」

ヴェルデはふと思いついたように言うと、私の左手首の婚約腕輪に意味ありげな視線

を向けて、にやりと笑いました。

「その腕輪って、魔具だよな？ 神聖魔法と勇者の魔力を感じるよ」

私はハツとして、とっさに腕輪を右手で覆おほいました。

「君をシユワルゼの城から運ぶ途中で気づいたんだけど、何か仕掛けがありそうだね、それ」

「え、えっと……」

私は狼狽うろたえて、一歩下がりました。

この腕輪は私とグリード様を繋つなぐ大切なもの。今の私のよすがです。

取られたり壊されたりしては絶対にダメだと、私の中の何かが強く訴えています！

私の動揺どうぶようぶりを見て、ヴェルデはクスクス笑いました。

「大丈夫。取ったりしないし、ディエールたちに言うつもりもないよ。それどころか二人にバレないように、保護の術で覆い隠してあげてるじゃないか」

私は目を見開きました。

「保護の術って、まさか……」

ヴェルデはペロツと舌を出して、悪戯いたづらっぽく言います。

「実を言うと、その腕輪が耐性たせいの低い君を魔力から守っているんだよ。僕の術はその腕

輪の力を、あの二人から見えないように覆い隠しているだけ」

「……え!？」

腕輪が私を保護してくれてるってことですか？ そしてヴェルデの術は、腕輪の力を他の幹部から隠すためのもの？

私は混乱しました。なぜヴェルデがそんなことをしてくれるのか、分からなかったからです。

「どうしてそんなことを……?」

私の当然の疑問に、ヴェルデはあっさり答えます。

「君に貸しを作ろうと思っただ。君というより、君を通じて勇者とエルフに……かな?」

「グリード様とルフアアガ様に……?」

「そう。あの二人に訴えかけるには、君を使うのが一番効果的みたいだからさ。いいかい、アーリア。これは大きな貸しだからね、覚えておいて」

ヴェルデは念を押すように言うと、カップをテーブルに置いて笑みを浮かべます。

「さて、これで君の質問は終わったかな？ じゃあ、次は僕の番だね」

私はその言葉を聞いて、気を引き締めました。

「この本について、君に聞きたいことがあるんだ」

ヴェルデがそう言った直後、その手の中に出現したのは、いつカルファア様が持っていたのと同じ、濃い緑色の本でした。

——「白き賢者」ことレン・シロサキが書いた、『勇者というシステム』。

「そ、その本は……！」

「知ってるだろう？ 人間たちの間では、長いことベストセラーだったというから」

「知っていますけど……」

知っているどころか、つい最近その本について、重要な話を聞いたばかりです。それは、レン・シロサキがその本を出版した意図——

そこまで考えて、私はハッとしました。

……まさか、ヴェルデが私に聞きたいことってそれ？ でも、なんで私がそれを知っているって分かったのでしょうか？

いえ、それよりも魔族が勇者について書かれた本を持っているという事実には、ツッコミを入れたい気分なのですが！

「そ、その本、読んだんですか？」

「もちろん読んだよ。でなければ、君にこの本について聞きたいなんて思うわけないでしょ」

ですよねー！ 正論です。でもあえて言わせてください、心の中で。

魔族が勇者についての本を読むなよ……！

そんな私のツッコミを知るよしもないヴェルデは、本をぺらぺらめくりながら言いました。

「僕がこの本を知ったのは、だいぶ前。人間の住むところをふらふら放浪ほうろうしていた時のことだ。異世界からの訪問者である著者についての知識は持っていたから、なんとなく読んでみたのさ。そして……驚いたよ。人間は真実をねじ曲げて広めているのかと思っていたら、この本には限りなく真実に近いことが書かれている。我々魔族のことも多く書かれていた。何らかの意図のもとにね」

私は内心ヒヤリとしました。す、鋭い……！

「僕は俄然興味がげんを覚えた。で、レン・シロサキについて調べることにしたのさ。彼の著作は全部読んで、彼が住んでいた場所に行ってみたり、彼が創設した新聞ギルドに侵入してみたりもしたよ。ギルドには直筆の原稿があつてね。持ち帰りがかったけど、侵入したのがバレーテルフたちに警戒されても困るから、ぐっと我慢した」

あ、あの……ヴェルデさん？ それ、もはやファンじゃないですか？

困惑する私をよそに、ヴェルデは何だかとても嬉しそうに話しています。しかも、だんだん興奮気味になってきました。

「そうしているうちに、彼の住んでいた異世界のことにも興味が出てきてね！ 彼の話をもとに描かれたという絵を手に入れて、異世界の部屋を再現してみたりもしたよ。ええっと、タタミというものが敷かれていて、エンガワというものがある部屋だ。この城の中にも作ったんだ。後でアリアにも見せてあげる」

「は、はあ……」

「でも残念なことに、レン・シロサキが使った武器は大神殿に保管されていて、見る事ができないんだよね。異世界からもたらされたものの中でも特に稀有なものだから、ぜひとも見てみたいんだけど……」

ちなみにレン・シロサキの武器は「スマホ」という、手の平に載るくらいの小さな箱型の装置だと言われています。それこそが「白き賢者」と呼ばれるレン・シロサキの知識の源であり、それを使って彼は勇者マティアスに数々の助言をしたらしいのです。

その実物が今も女神大神殿で大切に保管されているようですが、四百年経った今も内部の構造が複雑すぎて、複製を作ることなど到底できないのだとか。

……って、レン・シロサキの武器の説明は置いといて。先ほどからヴェルデのレン・

シロサキに対する熱狂ぶりが半端じゃありません。私は絶賛ドン引き中ですよ。

住んでいたところや新聞ギルドを訪ねたとか、直筆原稿を欲しがるとか、挙句の果てにタタミの部屋とエンガワというものまで再現したなんて……マニアすぎて怖いわ！

「彼が来たのが今の時代でなかったのが残念だ。彼と直接会って話をしてみたかったな。異世界の話とか」

ドン引き中の私をよそに、ヴェルデは嬉しそうに語り続けます。

「あ、そうそう、新聞ギルドと直筆原稿にほんの少し彼の魔力が残っていたから、そこから当時の彼の姿を何とか読み取ることができたんだ。この世界の人間とは、やっぱりちよつと違っていたなあ。アリア、君も見てみるかい？」

「へ？ み、見せていただけですか？」

そんなことが可能なのかと思つて驚きましたが、あの有名な「白き賢者」の姿を見られるというのなら、ぜひとも見たいです。

「もちろんだとも。特別に見せてあげるよ」

ヴェルデはそう言つて、すつと手を前に出しました。

次の瞬間、ヴェルデの手の平の上に、半透明の人形のようなものが現れたのです。

……これが、レン・シロサキ？

それは、グリード様たちと同じくらい年齢の青年でした。服装はローブとかではなく、普通のシャツとズボンです。正直に言って、全然賢者っぽく見えません。ごく普通の青年に見えます。

でも癖のある漆黒の髪に縁取られたその顔は、彫りが浅く、すつきりした印象で、やはり私たちとは少し違っています。美形というわけではないのですが、楽しいな笑みを浮かべた愛嬌のある顔には、人を惹きつける何かがありました。

……この人が、ルフアーガ様に「人間と魔族が話し合い、魔力を調節し合う世界の実現」を提案し、そのための布石を打った人物。

「言動も考えも、非常に興味深い人物だよ。著作も実にユニークだ。異世界の人間って、みんなこうなのかな。ねえ知ってる？ 彼は新聞ギルドを立ち上げて勇者物語の編纂に携わった後、異世界の文化についての記事を新聞に掲載していたって。大人気コーナーで、その記事からヒントを得て開発された魔具がたくさんあるんだってさ。そこにあるコンロ型の魔具もそう。誰でも簡単に火を起こせる調理器具が異世界にあるって、彼が新聞で紹介したから開発されたんだ。『コンロ』っていう言葉も元々は異世界のものだよ。道具だけじゃなくて、今ではあちこちで異世界由来の言葉が普通に使われている。

そんな風に、彼が人間社会にもたらした影響は大きい。でも、それは何のためなのか？ この本を発表する前は、『この世界に、変に影響を与えては困るから』と異世界の情報を仲間以外に伝えることを渋っていたらしいのに、なぜ突然、方向転換したんだろうね？」

その問いの答えを、私は知っています。

……彼は異世界の文化を広めることで、この世界の人間の意識を変えたかったのです。ヴェルデの手の上にあったレンの姿が掻き消えました。

「僕は彼の足跡をたどって色々調べたけれど、彼がこの本を書いた意図は未だに分からないんだ。ねえアーリア、僕は知りたいんだよ。この本に込められた、彼の考えを。そこに、僕の求める何かがある気がするんだ」

それからヴェルデは笑顔を消し、私に静かな眼差しを向けました。

「僕は考えた。レンがこの本を書いた意図を知っている者は誰かと。そう、エルフだよ。四百年前、彼と共に旅をしたエルフはまだ生きているだろう？ 彼はきつと、レンから何かしらの話を聞いているはず。そしてちょうどそのエルフは今、森深いエルフの里から出てきている。『導き手』として現代の勇者を補佐するために」

「……ルフアーガ様」

四百年前の勇者マティアスの時も、そして今も、「導き手」として勇者一行の旅に参加しているエルフ。彼こそが、私にレン・シロサキの「見果てぬ夢」について語ってくれたルファアガ様です。

「そう、彼だよ。でも彼に直接聞いても教えてもらえないはずがない。彼にとって僕は、討ち滅ぼすべき敵だからね」

私は頷きました。そう、世界に流れる魔力の量を一定に保つには、魔族の幹部は存在してはならない相手です。

それにルファアガ様の見立てでは、人間と魔族を話し合いの席につかせるには、まだまだ長い時間がかかるだろうとのこと。レンのまいた種がようやく芽吹き始めた今、魔族に計画を知られてその芽を潰されることを、ルファアガ様は警戒しているはず……

「彼に話を聞くのが無理なら、それを知っている他の誰かから聞けばいい。そこでエルフがそれを伝えそうな人間は誰かと考えた。まず挙げられるのは、当然勇者だ。でも今の勇者は何もかも規格外な上に変わり者だから、不安要素も多いはずだ。だからエルフは、その勇者に多大な影響を及ぼす相手にも同じことを伝えるだろう。つまり……君にね」

私はぎくりとしました。

「勇者の婚約者である君に、『導き手』は色々な話をしたはずだ。女神のこと、世界のこと、そして勇者と魔王の関係についても。ねえアーリア」

私を見つめるヴェルデの目に、強い光が浮かびました。有無を言わさぬ迫力を感じ、私は身をこわばらせます。

「エルフはこの本のことを、何か言ってなかったかい？ 知っているなら教えてくれな  
いかな」

なぜかヴェルデは、私がこの本について知っているものと確信しているようです。けれど、ルファアガ様から聞いた大切な話を簡単に他人に、ましてや魔族に話せるわけがありません。

でも話さなければ、この気まぐれな魔族は私をあつさり切り捨てるでしょう。身の安全を確保するためには、話すしかないようです。

不意にルファアガ様の言葉が頭を過りました。

『あなたが為すべきことは、ただ一つ。どのような場面においても、そして他の誰を犠牲にしても、必ず生き残ることです』

……あれはこんな時のための忠告だったのでしょうか？

「アーリア、僕は知りたいんだ」

私はヴェルデを見返し、一つの決断をしました。

「……分かりました。お話しいたします。私が知っていることを」

たとえ地面に這いつくばってでも生き抜いて、無事にグリード様と再会するんです。そのためにも、自分がすべきことをする。それだけです。

ルフアーガ様に心の中で謝りつつ、私はレン・シロサキの「見果てぬ夢」について、ヴェルデに話しました。

彼がその本を書いた意図、そして彼が異世界の文化を広めた意図も。

「へえ、へえ、へえ！」

ヴェルデは終始顔に喜色を浮かべ、興味深げに頷いたり、目を見開いたりしていました。

「まったく面白いことを考えるねえ！ 魔族には、まずできない発想だよ。なるほどね、だからこの本を書いたのか」

私が話し終わった後、ヴェルデはしきりに頷きながら「なるほどね」と繰り返して、レンの考えを咀嚼しているようでした。そんな彼に、私は尋ねます。

「その案について、どう思います？」

——ヴェルデにこの話をしたのは、一種の賭けでした。

これがアズールやノワールが相手だったら、私は知らぬ存ぜぬを貫いたでしょう。でも人間に……特にレン・シロサキに興味を持っているヴェルデなら、彼が芽吹かせたものを摘み取ることはしないのではと思ったのです。

それに、魔族である彼がこの話を聞いてどう思うのか、知りたかったというのもありました。

私の質問に、ヴェルデは笑顔であっさり答えます。

「面白い考えだけど、実現は不可能だね」

「……そうですか」

いえ、私自身もそう思ったわけですが、こうもはっきり言われると、何だかシヨボンとしてしまいます。

「魔王についての認識が甘いね。まあ、レンは人間だから仕方ないけど。魔王は人間に對する憎しみを捨てられないのさ。それを捨ててまで人間と共存する道を選ぶことは、まずないだろうね」

ヴェルデはそこまで言うと、本をテーブルに置いて、自分の向かいにあるソファを指さしました。

「とりあえず、座ったら？」

「え？でも、侍女は立ったまま控えているのが普通で……」

「いいから」

目を丸くする私に、ソファに座るよう重ねて促すヴェルデ。私が戸惑いながらも彼の向かいに腰を下ろすと、彼は静かな口調で言いました。

「知りたいことを話してくれたから、お礼として君に教えてあげるよ。魔王と——魔族の真実を」

## 2 魔王という存在

「まずはじめに言っておきたいのは、我々魔族は人間を必要としているということさ」「は？」

私は目を剥きました。何を言うかと思ったら……魔族が人間を必要としている？

「そんなバカな……」

だったら、どうして魔族は人間を襲うのでしょうか？

困惑する私をよそに、ヴェルデは続けます。

「正確に言うと、種の存続のために人間が必要なんだよ。ダイエールたちは否定するかもしれないが、それは事実だ。歴代の魔王は、人間を憎みながらも必要としているというジレンマを抱えていたのさ」

ヴェルデはそう言って、テーブルに置いた緑色の本を指さしました。

「その本にも書かれているように、我々魔族は本来、単なる魔力の塊にすぎない。けれど精霊を除けば、この世界に魔力だけで存在し続けることはできないんだ。だから魔族は魔力で生成した器を纏うことで、自らの存在を維持している。ただし、この器を生成するのには条件があるのさ」

「条件？」

「そう。我々はこの世界に実在する生物の姿を模倣して器を生成する。言い換えれば、この世界に実在しない生物の姿は取れないということ。レン・シロサキが広めたドラゴンの麒麟だのといった想像上の生物の姿をした魔族が存在しないのは、そのためさ。ここまで言えば、魔族が人間を必要としている理由の一つが分かるかな？」

私は戸惑いつつも口にしました。

「つ、つまり人間がいなくなると、人間の形を取れなくなるから……ですか？」

正解、とでも言うように、ヴェルデが笑みを浮かべました。

「そう。そして人の姿を取る高位の魔族がいなくなれば、魔族全体の統率が取れなくなつて魔族も滅びてしまふだろう。なぜなら我々はその生物を模倣して器を生成するからよつて、性質を大きく左右されるからだ。どんなに魔力を持つていようと、獣はしよせん獣にすぎないからね」

器に性質を大きく左右される。魔力を持つていようが、獣は獣でしかない。……なんとなく、ヴェルデの言いたいことが分かつてきた気がします。

大人しい動物の姿をした魔族は気性が穏やかで、猛獣の姿をした魔族は気性が激しい。それはレン・シロサキの著作が発表されて以来、研究によつて明らかにされてきたことです。

それと同じような原理で、獣の姿をした魔族は物の考え方も動物的。だから魔族全体を統率することなどできない。おそらくそう言いたいのだと思います。

「人間は獣とは違い、論理的な思考ができる生命体だ。我々は人間の姿を取ることで初めて、魔族全体を統率できる」

ヴェルデは自嘲するような笑みを私に向けました。

「これで分かつただろう？ 人間を必要としていたと言つた意味が。我々は人間を憎みながらも、人間に依存しているのさ。そして歴代の魔王は、その矛盾に気づき苦しんで

きた。今代の魔王……グライディオス様もそうだった」

ヴェルデはそこで、ふつと遠い目をします。

「人間に対する憎しみや怒りがこれほど強くなかつたら、この長きにわたる繰り返しの中で、別の方法を取れたかもしれない。それこそレン・シロサキが提唱した、人間と協議して世界に流す魔力の量を調節するという方法もね。けれど魔王たちは、人間に対する憎しみから逃れることができなかつた。それは、魔王だから尚更だったのかもしれない」

「魔王、だから？」

私の言葉にヴェルデは頷きました。

「高位の魔族ほど、人間に対する憎しみの度合いが深いんだ。魔獣はそうではない。やつらは生存本能で人間を襲っているだけで、憎しみなんて持っていないのさ。……まったく、人間の姿を模倣する魔族が人間を憎まねばならないとは、何と皮肉なことか」

そう言つて自嘲するヴェルデは、それまでの飄々とした彼とはまるで違つておりました。

「ヴェルデ？」

思わず呼びかけると、ヴェルデは私に顔を向けます。